慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	デイヴィドソンの三角測量的外在主義に基づく反懐疑論的論証について
Sub Title	On Davidson's anti-skeptical argument based on Triangular Externalism
Author	木下, 頌子(Kinoshita, Shoko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2014
Jtitle	哲學 No.133 (2014. 3) ,p.81- 102
JaLC DOI	
Abstract	In his later career, Donald Davidson developed his own brand of semantic externalism, which can be called "Triangular Externalism". According to Triangular Externalism, the fact that our utterances or beliefs have meaning presupposes the interrelations between (atleast) two subjects and common cause. Furthermore, Davidson famously draws a remarkable anti-skeptical conclusion from his Externalism. One of the most important premises of skeptical arguments is that it is possible that most of our utterances and beliefs are false (e.g. it is possible that I am a brain in a vat and so my current utterances and beliefs about external worlds are mostly false). However, according to Davidson, if Triangular Externalism is correct, this premise cannot be true. So any attempts to draw skeptical conclusions from this premise would fail. In this paper, I shall give a detailed explanation of this anti-skeptical argument by clarifying his Externalism. Then I shall try to answer two objections against Davidson's argument. I conclude that with slight modification of the argument, Davidson can successfully answer them.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000133-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

デイヴィドソンの三角測量的外在主義に基づく反懐疑論的論証について

木　下　頌　子*

On Davidson's Anti-skeptical Argument based on Triangular Externalism

Shoko Kinoshita

In his later career, Donald Davidson developed his own brand of semantic externalism, which can be called "Triangular Externalism". According to Triangular Externalism, the fact that our utterances or beliefs have meaning presupposes the interrelations between (at least) two subjects and common cause.

Furthermore, Davidson famously draws a remarkable anti-skeptical conclusion from his Externalism. One of the most important premises of skeptical arguments is that it is possible that most of our utterances and beliefs are false (e.g. it is possible that I am a brain in a vat and so my current utterances and beliefs about external worlds are mostly false). However, according to Davidson, if Triangular Externalism is correct, this premise cannot be true. So any attempts to draw skeptical conclusions from this premise would fail. In this paper, I shall give a detailed explanation of this anti-skeptical argument by clarifying his Externalism. Then I shall try to answer two objections against Davidson's argument. I conclude that with slight modification of the argument, Davidson can successfully answer them.

* 文学研究科哲学・倫理学専攻哲学分野博士一年

1　イントロダクション

本稿ではドナルド・デイヴィドソンの三角測量的外在主義（Triangular Externalism）に基づいた反懐疑論的主張を検討する．デイヴィドソンは，われわれの信念や思考，言葉の意味といった概念の本性について体系的な探究を行った哲学者である．それらの探究の中で，デイヴィドソンは信念や言語をもつための条件を明らかにし，その考察をもとに，知覚的信念の内容に関する独自の外在主義[1]（「三角測量的外在主義」と呼ばれる[2]）を提示した．ごく簡単に述べておくならば，三角測量的外在主義とは，われわれの知覚的信念の内容は，他の人，および外界との因果的相互作用を通じて特定されるとする立場である．そしてデイヴィドソンは，この三角測量的外在主義を採るならば，「われわれのすべての信念が総じて偽であることが不可能であることはあきらかであり，われわれは通常の形の懐疑論から救い出される」[3]と主張するのである．

デイヴィドソンが念頭においている懐疑論は，外界についてのラディカルな懐疑論，あるいはデカルト的懐疑論と呼ばれる類のものである．そうした懐疑論によれば，われわれは周りの世界の事柄について（「ここに水がある」，「うさぎが走っている」といった日常的な事柄に関してさえ）何事も知りえない．このような懐疑論的帰結を導く論証において，しばしば重要な出発点となるのは，「われわれは懐疑論的状況にいないことを知りえない」という前提である．懐疑論的状況とは，パトナムの水槽脳仮説[4]に代表されるように，実際に成り立っている事柄にまったく一致していない事柄をわれわれが誤って信じてしまっているような状況である．たとえばパトナムの水槽脳仮説では，身体から切り離された脳がコンピュータにつながれ，電気刺激によって通常の世界にいるような経験をもたせられる状況が想定される．この場合，この脳（水槽脳）は，われわれと同じように，「ここに水がある」，「うさぎが走っている」といった信念をもつように思われるが，実際には水槽脳の周囲にはうさぎも水も存在しないため，

それらはみな誤った信念である．

こうした懐疑論的状況について重要なのは，この状況が，通常の正しい信念をもつ状況と主観的に区別不可能とされる点にある．区別不可能であるがゆえに，われわれは自分がこの懐疑論的状況に陥っているのかどうか，決して知ることができない．懐疑論者は，この「われわれは自分が懐疑論的状況にいないことを知りえない」という主張から，外界に関するあらゆる知識が不可能であることを導くのである[5, 6]．

デイヴィドソンが三角測量的外在主義から直接に導く帰結は，「われわれの最も平易な諸信念がほとんどにおいて偽になることはありえない」[7]という主張である．これはまさに，懐疑論的状況そのものの不可能性を主張することである．というのも，懐疑論的状況は，大部分の信念が誤っている状況として想定されているからである．したがって，もしデイヴィドソンの議論が正しければ，われわれは自分たちが懐疑論的状況にいないことをア・プリオリな論証によって知ることができるのであり，したがって懐疑論的帰結を導く論証の前提を否定することができる．

本稿の主題は，デイヴィドソンの三角測量的外在主義が，実際に「大部分の信念が誤りであることは不可能である」という帰結をもつのかどうかを検討することである．具体的には，この問いに対して否定的回答を与えるB. ストラウドの反論に応答し，三角測量的外在主義のもとでは大部分の信念の誤りは排除されることを主張する．さらに，想定されうる，より複雑な懐疑論的状況をとりあげ，それについても三角測量的外在主義の立場からどのような応答が可能であるのかを考察する．そこで私は，こうした複雑な懐疑論的状況に基づく懐疑に答えるためには，デイヴィドソンの議論に一定の修正を加える必要があるということを指摘する．

2　三角測量的外在主義とは

本節では，次節以降の議論のために，デイヴィドソンの三角測量的外在主義がどのような立場であるのかを説明する．

三角測量的外在主義は，内容に関する外在主義の一バージョンである．内容に関する外在主義とは，主体の思考や信念，あるいは発話の内容が，部分的に，主体の外部の物理的あるいは社会的要因によって決定されるという立場である．そして，外在主義の中でも，三角測量的外在主義は，T. バージや H. パトナムによって擁護された知覚的外在主義（あるいは因果的外在主義）に属する．知覚的外在主義によれば，信念や発話の内容は知覚を通してそれらを引きおこした典型的な原因によって決まる．たとえば，単純な事例では，「There is a rabbit」という主体の発話が，しばしばうさぎ（あるいはうさぎがいるという出来事）によって引きおこされているならば，「There is a rabbit」という発話の内容は，うさぎについてのものであるということになる[8]．

デイヴィドソンも，発話の内容はその発話を典型的に引きおこす外界の原因によって決まると主張する点で，バージらの知覚的外在主義に賛成している．しかし，彼の三角測量的外在主義は独自な特徴をもつ．それは，三角測量的外在主義においては，発話の内容を決定する原因が，特定の関係にある二人以上の主体の発話を典型的に引きおこしている「共通原因」であるという点である．一般的な知覚的外在主義においては，内容の決定は一人の主体とそれに因果的に作用する外界の事物の間の二項関係によって説明される．それに対し，デイヴィドソンの三角測量的外在主義では，内容の決定は，二人の相互作用する主体と，二人の反応を引きおこす共通原因の三項関係によって説明される．つまり，ある人の発話の内容が決定されるためには，単にその人と外界の対象の間の因果作用だけでなく，その同じ対象に反応する他の主体との因果的相互作用も必要となるのである．具体的には，二人の主体は，めいめい外界の対象（たとえば牛）に対して，（「Cow」と発話するといった）反応を示し，さらに互いの反応を観察しあうことで，互いの反応が共通の原因についてのものであることを見出す．三角測量的外在主義によれば，こうしたプロセスにおいて，二人が

自分たちの反応の共通原因として見出すものこそが，二人の反応（「Cow」という発話）の内容を決定するのである．

デイヴィドソンが三角測量的外在主義という独自の外在主義を打ち出したのは，彼がバージらによる既存の知覚的外在主義に問題を見出していたからである．その問題は二つある．第一に，原因の不確定性の問題である．デイヴィドソンによれば，バージらが採用するような知覚的外在主義の枠組みでは，発話の内容を決定する「典型的な原因」がどのように確定されうるのかを説明できない．先に述べたように，知覚的外在主義では，ある主体太郎の発話の内容が何であるかは，太郎の発話を典型的に引きおこす原因を特定することで決まる．だが，デイヴィドソンによれば，このとき太郎一人だけの状況では，何が典型的な原因であるのか不確定なのである．いま，太郎が牛を目の前にして「Cow」と発話する状況を考えよう．このときわれわれはすぐに，太郎の発話を引きおこしたのは牛（あるいは牛がいるという出来事）だと考えたくなる．しかし，実際には「Cow」の発話につながる因果的連鎖は，太郎の脳神経の発火，太郎の網膜の刺激といった近位的原因から，太郎の網膜から牛の間の出来事，牛，牛よりずっと先の遠位的原因にまで伸びている．そして，デイヴィドソンによれば，この状況では，そのうちのどれが「Cow」の典型的原因であるのかを決める手立てはない[9]．

デイヴィドソンは，三角測量的外在主義においてはこの問題が解決されると主張する．というのも，二人の主体の反応の共通原因という考えは，因果連鎖のうちの脳神経の発火や網膜の刺激のような近位的原因を排除し，特定の対象あるいは出来事をとりだすことを可能にするからである[10]．やや図式的な言い方をするならば，相手の因果的連鎖の線と自分の因果的連鎖の先がぶつかったところがわれわれの反応の共通原因とされる[11]．これはちょうど，既存の二点を利用して，三点目の位置を測定する三角測量に類比的なのである[12]．

第二の問題は，発話や信念が内容をもつと言われるために必要な，「誤りの可能性」の問題である．ある発話が特定の内容をもつためには，その発話がそれを生じさせた原因について正しいときと誤っているときがあるということが成立していなければならない．たとえば，「There is a cow」という発話は，牛がいるときに正しく，牛がいないときには正しくないからこそ，牛についての特定の内容をもつと言いうる．もし，ある発話がそうした正しさの基準をもたなかったら，それは単なる反応にすぎず，何らかの内容をもつことはできない．つまり，発話は，それが誤りである可能性をもたなければならないのである．

さて，デイヴィドソンによれば，単なる知覚的外在主義の枠組みでは，この誤りの可能性を説明することができない．なぜなら，単独の主体が外界に対して様々な反応を示すというだけの状況においては，この主体の反応は誤りの可能性を確保できないからである．何らかの反応が誤りであるということは，それが通常反応している原因と違うものに対してその反応が示されるということである．しかし，デイヴィドソンが指摘するように，ある主体太郎一人が「Cow」といった反応を繰り返ししているという状況では，太郎の反応する原因のうちのどれが，その通常の原因であるのかを決める適切な手立ては存在しない．この状況では，太郎の「Cow」という反応は，それが生じるときすべての原因について正しいということさえ，原理的に排除されないのである（たとえば，太郎は牛や馬や羊に対して「Cow」と反応するかもしれないが，その場合でも「Cow」はそのすべてについて正しい反応であるということを排除するものは何もない）．それはつまり，太郎の「Cow」という反応について，誤りの可能性が確保できないということである．これが誤りの可能性の問題である．

デイヴィドソンは，三角測量的外在主義がここでも問題の解決に役立つと考える．三角測量的外在主義は，共通原因に訴えることによって，反応が誤りでありうるということを説明できる[13]．太郎と花子の特定の反応，

すなわち「Vache」という発話は，常に牛に対して示されてきた．ところが，あるとき太郎が「Vache」と反応したにも関わらず，花子は反応しなかった．するとこのとき，彼らのどちらかは，いつもの共通原因に対して正しい反応をしそこなった，ということが意味をなすようになる．つまり，通常一致している反応に食い違いが生じることにより，どちらかの反応が，誤りであるということが成立する余地が生まれるのだ．このように，三角測量的外在主義は，共通原因に対する反応の逸脱ということによって，ある反応が誤りでありうることを説明できるのである．

以上が，デイヴィドソンが三角測量的外在主義を支持する理由である．もちろん，今述べてきたような理由に対しては，様々な反論も提示されている[14]．ここでは三角測量的外在主義がそれなりに説得的な内容理論であることを動機づけたにすぎず，完全に正当化は行っていない．しかし本稿の問いは，三角測量的外在主義が，反懐疑論的帰結をもつのかどうかということである．それゆえ，三角測量的外在主義の内実について一定の理解が得られたことで満足し，次節へと進もう．もう一度確認しておくならば，三角測量的外在主義は，二人以上の主体が，相互作用を通じて特定する共通原因こそが，両者の言語的反応の内容を決定するという立場である．

3　三角測量的外在主義から導かれる反懐疑論的帰結

さて，デイヴィドソンは，前節で述べた三角測量的外在主義のもとでは，大部分の知覚的信念が誤りであることは不可能であると主張する．以下でこのことを説明しよう．

水槽脳のような状況が，知覚的信念の大部分が誤りである状況であるのは，実際に主体の信念内容と，信念の原因となっているもの（コンピュータプログラム，あるいは脳表面の刺激等）との間に乖離が生じているからである．

しかし，もし三角測量的外在主義が正しいとしたら，そうした乖離の余

地はないように思われる．というのも，三角測量的外在主義によれば，われわれの信念や発話の内容は，われわれコミュニケーションを行う者たちの発話や信念の共通原因である外界の対象によって決定されるからである．それはすなわち，こうした信念の内容が外界で生じていることがらに一致しているということである．

> もし何かが体系的にある経験（あるいは言語的反応）の原因となっているなら，そのときの思考と発話は，その何かについてのものである．体系的な誤りは，これによって排除される．もし，何もその経験の体系的な原因になっていないとしたら，間違いがそれについて生じるための内容もないのである[15]．

つまり，ある信念や発話を典型的に引きおこす原因がそれらの内容を決定しているのだから，そうした内容と，それらを引きおこす出来事や対象に乖離の余地は生じえない．したがって，われわれが信じていることの大部分が偽となることは不可能なのである．以上が，三角測量的外在主義が大規模な誤りの可能性を排除するとデイヴィドソンが考える理由である．

さて，こうしたデイヴィドソンの考えに対して，ストラウドが疑念を提起している．以下でこの疑念を取り上げ，それに応答する．

4　ストラウドの疑念

ストラウドは，デイヴィドソンの三角測量的外在主義の特殊な性格に注目し，以下のように疑念を提起する．たしかに，前節のデイヴィドソンの引用で述べられるように，信念や発話を引きおこす原因が実際に発話の内容を決定しているのであれば，その原因と内容との乖離が生じないということは正しいかもしれない．しかし，デイヴィドソンの三角測量的外在主義の細部を忠実に理解するならば，そうしたことが言えるのかは疑問である．というのも，三角測量的外在主義において，発話や信念の内容を決定するとされたのは，単なる「原因」ではなく，相互作用するわれわれが互

いの発話の「共通原因とみなすもの」だからである．発話を実際にひきおこす「原因」とわれわれが「共通原因とみなすもの」は異なる．ストラウドは，「実際に原因であるもの」と「共通原因とみなされている」にすぎないものの間には乖離が生じうると指摘し，そのことによって三角測量的外在主義の枠組みで大規模な誤りが可能であると主張するのである．このストラウドの批判に答えておくことは，デイヴィドソンの三角測量的外在主義を理解する上で重要である．

ストラウドは三角測量的外在主義における懐疑論的状況の可能性を，次のような想定に訴えて表現している[16]．いま，三角測量の状況で，ＡとＢが互いに相手を観察しながら，互いの反応を引きおこしている原因を特定しようとしている．そして，ＡとＢは，互いの反応，たとえば，「うさぎがいる」という発話を引きおこしている原因をうさぎ（あるいはうさぎがいるという出来事）だとみなすに至る．さらに，ＡとＢは，こうした互いの反応を繰り返し観察することを通して，互いの反応（「うさぎがいる」という発話）と，それを引き起こしていると両者がみなしている原因との間の結びつきを確立する．その結果，互いの発話の内容は，うさぎについてのものとして特定される．しかし，それにもかかわらず実際には，本当に互いの反応を引きおこしているのはうさぎではなく，（たとえば）うさぎによく似たロボットであったとしよう．するとこのとき，両者の発話はうさぎについてのものであるにもかかわらず，実際に互いの反応を引きおこしているのはうさぎではないため，両者の発話は本当は誤りである[17]．

こうしたストラウドの想定のポイントは，ＡとＢが原因とみなしているものと，ＡとＢの反応を引きおこしている実際の原因が異なる場合が考えられるかぎり，三角測量による内容確定の場面においても，われわれの発話が実際には誤りとなることがありうるという点である．この点を，その他のあらゆる知覚的信念にも拡張するならば，三角測量的外在主義を採りながら，大部分の信念が誤った人を考えることは可能である．した

がって，三角測量的外在主義は反懐疑論的帰結をもたない，とストラウドは主張するのである．

5　ストラウドへの応答

もしストラウドの指摘が正しいならば，デイヴィドソンの三角測量的外在主義の枠組みの中でも懐疑論の余地は存在することになる．だが，実のところ，三角測量の内実をよく理解するならば，ストラウドの指摘するような疑念は生じえない[18]．

ストラウドの疑念は，三角測量の状況において二人の主体が互いの反応の原因とみなすものと，二人の反応を実際に引きおこしている原因が異なる状況が可能であるように思われるということに本質的に基づいている．しかし，三角測量がそもそも，われわれの発話や信念の内容がどのようにして決まるのかということを説明するものであることを思い出すならば，ストラウドが想定するような状況は理解不可能である．

まず，三角測量の状況を確認しよう．三角測量において二人の主体は，互いの反応を観察しながら，互いの反応と，それを引きおこしている原因との結びつきを確立しようとする．たとえば，二人の主体は，あるタイプの原因（たとえば，特定の種類の生物個体）が現れるたびに互いが「うさぎ」と発話するということを繰り返し観察する．そのことによって二人は，その原因と「うさぎ」という発話との間の結びつきを確立し，「うさぎ」という発話の内容を確定するのである．

そして，ここで注意すべきなのは，二人の主体が言語的反応と原因の間の結びつきを確立することに先立って，二人が互いの反応を引きおこす共通原因を「うさぎとみなす」ことなど不可能だということである．なぜなら，ある人が何らかのものをうさぎとみなすことが可能になるためには，その人はうさぎについての信念を形成できるのでなければならず，そうした信念は，内容確定に先立って与えられているものではないからである．したがって，三角測量の場面において，二人の主体は，互いの言語的反応

を引きおこしている原因を，実際の原因以外のものとみなすことなどできない．誤解をおそれず述べるならば，二人の主体にとって，二人の「うさぎ」という発話を引きおこす典型的な原因がうさぎロボットであるかぎり，二人の発話の内容は，その発話の実際の原因であるうさぎロボットであるしかない．したがって，われわれの発話や信念の内容が，それを引きおこす実際の原因以外のものによって特定されるというストラウドの懐疑論的想定は，われわれがはじめて発話や信念の内容を与えられる三角測量の場面を考えるかぎりは，可能なものではない．したがってこのケースについて，信念の大部分が誤りであることは不可能であるという主張は脅かされないと結論してよいだろう．そしてこのことによってデイヴィドソンは，懐疑論的論証の前提である，「われわれは懐疑論的状況にいないことを知りえない」という主張を否定できるのである．

6　さらなる疑い

ここまで，私はストラウドの懐疑に答えてきた．そのポイントは，三角測量が内容決定のプロセスであるかぎり，それに先立って，内容が与えられていると考えることはできないということであった．何であれ，われわれが一致して同じ反応を示してきた対象（あるいは出来事）が，われわれの反応の，そして発話や信念の内容を決定するのである．われわれは，このことが大規模な誤りの想定を不可能にするということを見た．

しかしここで，いったん内容が決定されたあとでならば，大規模な誤りに陥る可能性を考えることができるのではないかという疑念が生じうる．つまり，信念や発話を引きおこす共通原因によって，それらの内容が確定したあとで，その原因が，われわれの気づかないうちに別のものに変わっているという状況が考えられる．そうした場合，われわれの大部分の信念が誤りであることが可能になるのではないだろうか[19]．

この疑念は，具体的には，以下のような想像的事例によって表現できるかもしれない．まず，有名なパトナムの双子地球[20]を考えよう．パトナ

ムの双子地球とは，ただ一点を除いて，地球とまったく同一の物理的複製である．双子地球には，木や猫やキャベツが地球とまったく同様に存在し，またわれわれの物理的複製が存在している．ただ一点の違いは，水である．双子地球にも，川を流れ，湖を満たし，飲むことができる透明な液体は存在する．その液体は，表面的な性質の点では，地球の水と何ら変わりがない．しかし，その化学的組成は，H_2O とは別の複雑なもの（仮に XYZ とされる）になっている．

さて，われわれがこれから考える懐疑論的状況はこの双子地球を改変することによって得られる．すなわち，パトナムの双子地球の水における違いを，他のあらゆる自然的事物へと拡張した双子地球を考えるのである．この双子地球には，地球上の金や猫やキャベツなどと見かけ上よく似たものが存在しているが，それらの根底的性質は，まったく別のものとなっている．たとえば，金のようなみかけをもつ物質を組成する元素は Au でないかもしれないし，猫は電子チップが埋め込まれた猫ロボットであるかもしれない．こうした状況で，ある地球人オスカーを考えよう．オスカーは，地球で生まれ育ち，周囲の人々および地球の事物と三角測量することによって，有意味な言語を獲得している．オスカーの発話「水」や「猫」は，地球上の水（H_2O）や猫（猫ロボットでない猫）についてのものになるだろう．さて大規模な誤りの可能性は，オスカーを本人には気づかれないように，双子地球に移行させるときに生じうるように思われる．双子地球に連れてこられたオスカーは，水や猫を見て「水がある」「猫が走っている」などと，発話するだろう．このとき，オスカーの「水」や「猫」は地球上の水や猫についてのものであるのだから，彼の発話は誤りになるのではないだろうか．

以上が，人生の途中から大規模な誤りに陥るケースとして想定される状況である．デイヴィドソンは，こうした懐疑に対して答えることができるのだろうか．デイヴィドソン自身は，著作においてこのさらなる懐疑を明

示的に検討していない．そこで私は以下で，三角測量的外在主義に与するデイヴィドソンの立場から，どのような答えが引き出されうるのかを考察することにしたい．

7　応答の提案

残念ながら，三角測量的外在主義には，このケースでオスカーの信念の大部分が誤りになる，ということを否定するような要素があるとは思われない．それどころか，デイヴィドソンが別の文脈において述べている見解を参照するかぎり，彼はオスカーが大部分誤った信念をもつことを認めざるをえないように思われる．デイヴィドソンは，論文「自分自身の心を知ること」の中で，パトナムの双子地球に言及している．その際彼は，まさに地球と双子地球の間を知らずに移行させられた主体の「水がある」という発話の内容について語っている．そこで彼は，移行させられた人の「水がある」という発話は，もともといた環境での水（双子水）についてのものであり，移行先では誤りになると述べている．

> すでに述べたように，どちらも，一杯の水や双子水を示されれば，誠実に「一杯の水がある」と言う．彼らがどちらも故郷の環境におかれているなら，どちらも正しい．環境が入れ替わっていれば，どちらもまちがっている[21]．

この記述に従うかぎり，デイヴィドソンは，改変双子地球に移行したオスカーの「水がある」，「金が見える」，「猫が走っている」といった発話はことごとく誤りになると言うことになるだろう．つまり，改変双子地球においては，大部分の信念が誤りであるという状況が可能であることになってしまう．このことは，大部分の信念が誤りであることは不可能であると主張することで懐疑論的論証をブロックしようとするデイヴィドソンにとって致命的な事態ではないだろうか．

たしかに，ここでデイヴィドソンは，大部分の信念が誤りとなる状況が

不可能だという主張を維持することができないということを認めなければならない，と私は考える．すると，この主張に基づいて懐疑論的帰結を否定しようとするデイヴィドソンの試みも，失敗に終わるかのように思われる．しかし実は，懐疑論的帰結を否定するという目的に照らすならば，デイヴィドソンに道が残されていないわけではない．この改変双子地球の状況を注意深く考えてみるならば，このケースにおいて大規模な誤りが可能であることは，懐疑論を否定するという課題にあたって実はそれほど問題ではないと言うことができるのである．

本稿の冒頭で述べたように，われわれの知識を脅かす懐疑論的論証は，われわれが水槽脳のように大規模に誤った状態にないことを知りえないという仮定を必要とする．つまり，懐疑論者は，単に大部分の誤った信念をもつ状況が可能であると主張するだけでなく，自分がそうした状況にいるかどうか知りえないことを主張しなければならないのである（水槽脳の状況が問題なのは，単にわれわれの大部分の信念が偽である状況だからではなく，われわれがそうした状況にあるかどうか知りえないからである）．では今回の改変双子地球のケースに関して，懐疑論者は，「われわれは自分の信念の大部分が誤りであるという状況にないことを知りえない」と主張することができるだろうか．私は，ここで想定された状況を注意深く見るならば，それはできないと考える．というのも，ここがポイントになるのだが，地球にいるか双子地球にいるかということは，オスカーに知りえない事柄ではないからである．なぜならオスカーは，水の組成が H_2O であるか，XYZ であるか，猫が地球の猫であるのかそれとも双子地球の猫ロボットであるのかを，他人や世界との相互作用を通じて気づきうるからだ．たとえば，オスカーは水の組成や猫の細胞を調べることもできるし，専門家に教えてもらうこともできる．たしかに，オスカーが科学的知識に乏しいならば，彼がその違いに気づくことが困難であるかもしれないが，それは不可能なことではない．だとすれば，この種の誤った信念を一時的

に広範に有する可能性は，懐疑論を導くような脅威ではないと考えられる．

このように，デイヴィドソンは，この改変双子地球のケースについては，たとえ大規模な誤りが可能になるとしても，そこで可能になる誤りの状況はわれわれが原理的に知りうるものである以上，無害なものにすぎないということを指摘することができる．つまり，この状況は，懐疑論的論証を成立させるには，不十分なものなのである．

8　より深い懐疑

だが以上の応答に対して，より深刻な大規模な誤りのケースをつくることができると考える人がいるかもしれない．先のケースが，われわれの知識を脅かす懐疑論的状況にならなかったのは，そこで想定された大規模な誤りが気づきうるような誤りであったからである．このことは，地球と双子地球の違いを，水的な物質における H_2O と XYZ の違いのように，われわれが科学的探究によって区別できる違いとして設定していたことによる．だからこそわれわれは，双子地球に移行したときに犯す自分の誤りを知ることができるのである．それではここで，地球と双子地球の間にある違いを，われわれには原理的に区別不可能なものとして設定したらどうだろうか．その場合，地球から双子地球へと移行させられた人は，決して気づきえない誤りを犯すことになるのではないだろうか．もしそうだとすれば，われわれは三角測量的外在主義のもとでも，われわれは懐疑論的状況にいることを知りえないという懐疑論の前提を認めなければならなくなる．

この疑念に答えるために，要求された状況を設定してみよう．すなわち，われわれには原理的に解明しえない違いをもつ地球と双子地球を考えるのである．双子地球の水は，透明で，液体であり，H_2O であるが，何らかの根底的なレベルで地球の水とは異なっている．「何らかの根底的なレベルで」というのは，はっきりしない言い方であるが，とにかくわれわれには区別できないが，懐疑に必要な違いがそこにはあると仮定しなけれ

ばならない．そして，同様の違いが他のあらゆる事物についても存在するとする[22]．このような場合，地球で「水」「猫」「金」等を学んだオスカーは，双子地球において大規模に誤った信念をもつことになるだろうか．もしそうだとすれば今度こそ懐疑論者は，われわれは大規模に誤った状況にいないことを知りえないと主張することができるだろう．なぜならこのケースにおいては，仮定上，いくら水や猫を調べたところで自分がどちらの地球にいるかを知ることはできないからである．

しかしながら，この新たなケースについては，デイヴィドソンは，そもそも双子地球に行ったオスカーが大規模な誤りに陥ることにはならないと論ずることができる．つまり，このケースでは前節の場合とは異なり，大規模な誤りそのものを否定できるのである．なぜなら，三角測量的外在主義の立場からすると，このケースにおいて，オスカーの「水がある」という発話は，双子地球の水的な液体にも正しく適用されることになるだろうからだ．以下でこの点を説明しよう．

2節における三角測量的外在主義の説明を思い出そう．その際，発話の内容が決定されるためには，その発話が誤りである可能性がなければならないということが指摘された．そして，三角測量的外在主義においては，この誤りの可能性を，われわれの反応の食い違いの可能性に訴えて確保することを見た．前節の想定において，双子地球に移行させられたオスカーの「水がある」という発話がなぜ誤りになるのかを再考してみよう．それは，他の科学者集団が，双子地球に行った場合に，双子地球の水的な液体（XYZ）を調べて，「これは水ではない」と言うであろうからである．つまり，双子地球の水的な液体に対するオスカーと，科学者たちの反応には食い違いが生じる．そして，オスカーは，自分が通常「水がある」と発話する原因である H_2O でない物質に対して，「水がある」と反応していたことに気づきうる．だからこそオスカーの発話「水がある」は，誤りであったのだ．

それでは今回のケースに戻ろう.「水がある」というオスカーと他の人々の間に食い違いは生じうるだろうか．生じることはありえない．なぜなら，今回のケースで，地球の水と双子地球の水的な液体の間には，われわれの反応の食い違いを引きおこすようないかなる違いも存在しないからである．たとえ科学者が調べたとしても，双子地球の液体は,「水である」と言われる．そうであるとすれば，オスカー（およびわれわれ）の「水がある」という発話が誤りであるということに実質が与えられる余地はない．われわれが，一致して，双子地球の水的な液体にも「水がある」と反応し続けるかぎり，その発話はその共通原因となっている地球の水および双子水についてのものであり，正しいのである.

教訓は以下である．われわれの発話や信念が誤りであるためには，その誤りは原理的にわれわれが気づきうるものでなければならない．つまり，われわれが知りえないような形で，大規模に誤っているということは，いかなる場合においても不可能なのである.

以上が，内容が確定したあとで環境が変わるケースに基づく懐疑に対して，デイヴィドソンが与えうる応答である[23].

9　結論

本稿では，デイヴィドソンの三角測量的外在主義が反懐疑論的帰結をもつのかどうかを検討した．まず，三角測量のプロセスを明らかにすることで，われわれの発話や信念は，それらを典型的に引きおこす原因についてのものだとみなされなければならず，それゆえに大規模には誤りえないことを確認した．次に，この議論に対して，ストラウドが提示した，われわれに「原因とみなされた」原因は，本当の原因でないかもしれないという疑念に応答した．そこで私は，内容確定の際に，本当の原因とわれわれにそうとみなされた原因の乖離は起こりえないことを指摘した．さらに，内容が決定されてから，主体に気づかれずに環境が変化する可能性に訴えた懐疑に対して，デイヴィドソンがどのように応答しうるのかを検討した.

そこで私は，ある場合においてはデイヴィドソンの議論に一定の修正を加えなければならないことを認めたが，その一方で，懐疑論を否定するという彼の結論は維持されうるということを論じた．デイヴィドソンの議論は，先の修正を踏まえて述べ直すならば，次のことを示そうとするものである．すなわち，われわれの信念や発話がどのような仕方で内容をもつようになるのかを適切に理解するかぎり，われわれの信念や発話の大部分が，「われわれが知りえないような仕方で」誤っているということはありえないということである．本稿の議論が正しければ，こうしたデイヴィドソンの議論は，われわれの知識の可能性を脅かす懐疑論的想定を無害化する力をもつのである．

謝辞：本稿の作成にあたってたくさんの有益なコメントをくださった，指導教官である柏端達也先生，鈴木生郎，秋葉剛史，小草泰，高橋優太の各氏，およびアプリオリ研究会，2013 年 12 月 MIPS 例会参加者の方々に深く感謝申し上げます．

参考文献

Amoretti, M. C. (2011), “Triangulation between Externalism and Internalism”, in M. C. Amoretti and G. Preyer (eds.), *Triangulation: From an Epistemological Point of View*, Ontos Verlag, pp. 47–68.

Bernecker S. (2013) “Triangular Externalism”, in E. LePore and K. Ludwig (eds.), A Companion to Donald Davidson, pp. 443–455.

Bridge, J. (2006), “Davidson’s Transcendental Externalism”, in *Philosophy and Phenomenological Research*, 73, pp. 290–315.

Carpenter, A. (2003), “Davidson’s Transcendental Argumentation”, in J. Malpas (ed.), From Kant to Davidson, Routledge, pp. 219–237.

Davidson D. (1983), “A Coherence Theory of Truth and Knowledge”, Reprinted in Davidson (2001a), pp. 137–153. [邦訳書 pp. 218–244 に所収.]

Davidson D. (1987), “Knowing One’ Own Mind”, Reprinted in Davidson (2001a), pp. 15–38. [邦訳書 pp. 35–71 に所収.]

Davidson D. (1990), “Epistemology Externalized”, Reprinted in Davidson (2001a), pp. 193–204. [邦訳書 pp. 300–316 に所収.]

Davidson D. (1991), “Three Varieties of Knowledge”, Reprinted in Davidson

(2001a), pp. 205–220.［邦訳書 pp. 317–339 に所収.］

Davidson D. (1992), "The Second Person", Reprinted in Davidson (2001a), pp. 107–122.［邦訳書 pp. 175–198 に所収.］

Davidson, D. (2001a), *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford: Clarendon Press.［邦訳　D. デイヴィドソン『主観的，間主観的，客観的』，清塚邦彦・柏端達也・篠原成彦訳，春秋社，2007 年.］

Davidson, D. (2001b), "Externalism" in *Interpreting Davidson*, P. Kotatko, G. Pagin, and G. Segal, (eds), Stanford: CSLI, pp. 1–16.

Davidson, D. (2001c), "Reply to Karly Vary Papers" in P. Kotatko, G. Pagin, and G. Segal, (eds), *Interpreting Davidson*, Stanford: CSLI, pp. 285–308.

Gluer, K. (2006), "Triangulation", in E. Lepore, and B. Smith, (eds), *The Oxford Handbook of Philosophy of Language,* Oxford University Press, pp. 1006–1019.

Gluer, K. (2011), *Donald Davidson,* Oxford University Press.

LePore E. and Ludwig, K. (2005), *Donald Davidson: Meaning, Truth, Language, and Reality,* Oxford University Press.

Luper, S. (2011), "Cartesian Skepticism", in D. Pritchard and S. Bernecker (eds.), The Routledge Companion to Epistemology, Routledge, pp. 414–424.

Montminy, M. (2003), "Triangulation, Objectivity and the Ambiguity Problem", CRITICA, vol. 35, No. 105, pp. 25–48.

Pagin, P. (2001), "Semantic Triangulation", in P. Kotatko, G. Pagin, and G. Segal, (eds), *Interpreting Davidson*, Stanford: CSLI, pp. 199–212.

Pritchard, D. (2010), *What is This Thing Called Knowledge?*, 2nd edition, Routledge.

Pritchard, D. (2013), "Davidson and Radical Skepticism", in E. Lepore and K. Ludwig (eds.), *A Companion to Donald Davidson*, Wiley Blackwell, pp. 521–532.

Putnam, H. (1975), "The Meaning of "Meaning"", in *Philosophical Papers, Vol. II: Mind, Language, and Reality*, Cambridge: Cambridge University Press.

Putnam, H. (1981), *Reason, Truth, and History*, Cambridge University Press.［邦訳 H. パトナム，『理性・真理・歴史』，野本和幸・中川　大・三上勝生・金子洋之訳，法政大学出版局，1994 年.］

Stroud, B. (1999), "Radical Interpretation and Philosophical Skepticism", in L. E. Hahn (ed.), *The Philosophy of Donald Davidson,* LaSalle, Ill: Open Court, pp. 139–161.

Verheggen, C. (2011), "Triangulation and Philosophical Skepticism", in M. C.

Amoretti and G. Preyer (eds.), *Triangulation: From an Epistemological Point of View*, Ontos Verlag, pp. 31–46.

註

[1] 2節でも詳しく述べるが，内容に関する外在主義とは，一般に，信念や思考などの心的態度の内容が主体の外部の物理的・社会的要因に部分的に依存するとする立場である．競合する立場である内容に関する内在主義は，反対に，心的態度の内容が，脳状態のような主体の内在的性質のみによって完全に決まると考える立場である．

[2]「三角測量的外在主義」という用語は，デイヴィドソン自身のものではない．しかし，この用語は，数人の論者の使用（たとえば，Carpenter (2003), Amoretti (2011), Bernecker (2013)）によって普及しつつあり，他の外在主義との区別のためにも便利であるので，本稿でもこの呼称を採用する．

[3] Davidson (1983), p. 153［邦訳 p. 243］.

[4] Putnam (1981).

[5] ここで想定しているのは，以下のようなタイプの懐疑論的論証である．
任意の主体Sと，日常的命題P（ex. ここに机がある）について，
（1）Sは自分が懐疑論的状況にないことを知りえない．
（2）Sは自分が懐疑論的状況にないことを知りえないならば，Pを知りえない．
（3）ゆえに，SはPを知りえない．（(1), (2) より）
こうした議論が正しいならば，われわれが通常知っていると思っているどのような命題についてもそれを知りえないという結論がごく一般的に導かれる．(2) は，Pであることから懐疑論的状況にないということが導かれること，そのことを主体が知っているということ，および主体の知識に関する「閉包原理」から導きだされる．しばしばこの論証に対して (2) を否定する議論が提示されることがあるが，デイヴィドソンの議論は，(1) を否定するものとして理解することができる．

[6] デカルト的懐疑論の説明は，Pritchard (2010) および Luper (2011) を参考にしている．

[7] Davidson (1991), p. 196［邦訳 p. 305］．ほかに，「われわれの最も単純な知覚的信念の多くは真である」(1991), p. 213［邦訳 p. 329］など．

[8] 以下では，主に発話の内容についての例がとりあげられるが，発話について言われることは信念についても同様に言われると考えてほしい．

[9]「一つの生物をそれ自体として考察しているかぎり，その生物の反応からはけっして，その反応がどれほど複雑なものでも，当の生物が反応している（考

えている）対象が，たとえば体表ではなく一定の距離を隔てた出来事だといったことがあきらかになることはありえない.」Davidson（1992), p. 119［邦訳 p. 191］．ほかにも Davidson（1991), p. 201［邦訳 p. 312］など.

[10] より厳密には，「もっとも近い共通原因」である.「もっとも近い」という制限によって，より遠くの原因が排除される.

[11]「二つの視点があって初めて，思考の原因に場所が与えられ，ひいては，思考の内容が決まる．それはある種の三角測量とみることができる．二人の人物の各々は，一定方向から流れ込む感覚刺激に別様に反応している．刺激が流れこんでくるさいの通路を外部へと引き延ばすと，その交点が共通の原因である」Davidson（1991), pp. 212-213［邦訳 p. 328］.

[12] 三角測量とは本来，航海などで用いられる測量法であり，既知の二点間の距離と，二つの角度から，三角法によって，三点目の位置を決定する．デイヴィドソンは，二人の人物が自分たちの共通原因を特定するというプロセスを，この測量法になぞらえたのである.

[13]「一人以上の生物を導入することは，一人の生物がいる状況に基本的な何かを付け加える．なぜなら彼らの行為が食い違うかもしれないという可能性をもって，我々は誤謬の概念が意味を成すのに必要とされるギャップを導入したからである.」Davidson（2001b), p. 4.

[14] 三角測量的外在主義を支持するデイヴィドソンの論証に対する反論は，たとえば，Pagin（2001), Montminy（2003), Bridge（2006), Gluer（2006）などに見られる.

[15] Davidson（1990), p. 201［邦訳 p. 311］．ほかに，「最も基礎的なケースにおいて，言葉と思考が，必然的に，通常それらの原因となるような種類の物体や出来事についてのものであるのだとすれば，そのような物体や出来事の存在の独立性についてデカルト的な懐疑が生じる余地はないことになる.」（Davidson（1988), p. 45［邦訳 p. 81］.）

[16]「A は B のある発話がうさぎがいることによって引きおこされていると信じており，B は A のある発話がうさぎがいることによって引きおこされていると信じているならば，そのとき彼らは互いに相手の発話に意味を帰属させることができるのであり，そしてそれゆえに，うさぎが視野の内にいるという信念を互いに帰属させることができる．彼らはこうした基盤のもとに相手とコミュニケーションを行うことができる．だが，このコミュニケーションが成立するために，彼らの発話が実際にうさぎがいることによって引き起こされるということは必要とされないのだ.」Stroud（1999), p. 153.

[17] Stroud（1999), pp. 153-154.

[18] ストラウドの疑念に対する本節の批判は，Verheggen（2011）に負うところが多い．ヴァーヘッゲンは，三角測量の成立が内容を所有するための条件であることをストラウドが見過ごしているということを指摘している．本節の以下の議論は，このヴァーヘッゲンのポイントを，三角測量において内容がどのような確定されるのかに即して裏付けるものである．

[19] 内容確定後に主体が気づかずに環境を変えられるケースに基づく懐疑論は，アモレッティによっても提起されている．アモレッティは，主体が人生の途中から水槽脳化される状況を想定し，この場合には，デイヴィドソンの三角測量的外在主義は無力であると指摘している（Amoretti（2011），pp. 62–63）．本稿では直接水槽脳化のケースを取りあつかってはいないが，本節以降の議論は，アモレッティへの応答にもつながりうるものである．（この点については注 24 も参照のこと）

[20] Putnam（1975）．

[21] Davidson（1987），p. 21［邦訳 p. 57］．

[22] 原理的に誰も気づきえない違いが存在するということ自体，ひょっとすると整合的に想定困難な状況であるのかもしれない．しかしここでは，議論のため，この想定が可能なものとして話を進めたい．

[23] 注 20 で触れた，アモレッティが想定するケース（主体が人生の途中で水槽脳化されるケース）が，6 節と本節でとり上げた二つの懐疑論的状況のどちらかと類比的に扱うことができるのかどうかは，微妙な問題である．一方で，水槽脳化された主体にとって，通常の状態と水槽脳の状態は区別不可能であり，その点で本節で論じられたより深い懐疑の状況と類似している．他方で，水槽脳の思考実験の場合には，主体を水槽脳化したマッドサイエンティストが思考実験の中に存在し，彼は水槽脳の主体の状態の違いを知っている．そのため，マッドサイエンティストが水槽脳に電気信号を通じて語りかけることで種明かしをし，主体が自分は水槽脳であることに気づくという事態は，原理的に不可能ではない．したがって，もしそうした事態が可能とされるのであるならば，水槽脳化のケースは，6 節で論じられた「主体が誤りに気づきうるケース」に近いかもしれない．本稿で詳細な検討を行うことはできないが，水槽脳化のケースが 6 節あるいは 8 節で想定された状況のいずれかと類比的であることを明らかにすることで，アモレッティの懐疑にも答えうるだろう．